

2013 都民芸術フェスティバル参加公演



第四十三回

# 邦楽

日本の四季 I

# 演奏会



河東節



義太夫節



箏曲



長唄



常磐津節



清元節



新内節



宮園節

【主催】邦楽連合会

(一社) 義太夫協会

清元協会

(二財) 古曲会

新内協会

常磐津協会

(一社) 長唄協会

(公社) 日本三曲協会

【助成】東京都・(公財)東京都歴史文化財団

邦楽振興基金

【後援】(公財)日本伝統文化振興財団

平成25年3月23日〔土〕 国立劇場小劇場

完全入れ替え制・全席自由  
第一部◎開場11時 開演12時  
第二部◎開場15時半 開演16時

## ご挨拶

本日は、二〇一三都民芸術フェスティバル「邦楽演奏会」にお運びくださいます。ありがとうございます。

昭和四十六年から続いておりますこの演奏会は、本年をもちまして四十三回を数えます。この催しは、多種の邦楽を一同に集めまして、義太夫協会、清元教会、古曲会、新内協会、常磐津協会、長唄協会、日本三曲協会という七つの団体（邦楽連合会）が力を合わせて、日本の伝統芸能をお聴かせする、他に例を見ない大変に意義のある鑑賞会と自負致しております。

また、この度は、「日本の四季Ⅰ」という副題を設け、曲と曲の間には、ナビゲーターとして三遊亭王楽師匠の楽しいお話で綴って頂くなど、皆様に、より邦楽に親しんで頂けますようにと心新たに企画致しました。

何かと不行き届きの点もあるかと存じますが、お許しを頂きまして、どうかごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

平成二十五年吉辰

邦楽連合会代表 萩岡松韻

## 第四十三回邦楽演奏会 第一部 十二時開演

- 一、 河東節 助六由縁江戸桜
- 二、 義太夫節 伊勢音頭恋寝刃 油屋の段
- 三、 箏曲 江の島曲
- 四、 清元節 色増艳夕映（雁金）  
―休憩十分―
- 五、 長唄 秋の色種
- 六、 常磐津節 道行恋三度笠（梅川・下）
- 七、 新内節 明烏夢泡雪 雪賣の段

※演奏者により歌詞に若干の違いがある場合がございます。また、歌詞の中に現代では不適切な語句を含む場合がございますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、その点はご了承下さい。



## 二、義太夫節 伊勢音頭恋寝刃

油屋の段

浄瑠璃

〈人間国宝〉  
竹本 駒之助

三味線

鶴澤 津賀寿

天保九年（一八三八）大坂稻荷東の芝居初演。

近松徳三らによる合作、伊勢の古市を舞台にした夏狂言の代表作です。福岡貢は武家の生まれですが、今は伊勢にきて御師（下級神職）となり、旧主今田万次郎が紛失した名刀「青江下坂」を探しています。刀は手に入れたもののその折紙（鑑定書）が見つかりません。古市の遊郭油屋の遊女お紺は貢と相愛の仲ですが、客の徳島岩次が折紙を密かに懐中している事を知り、岩次に身をまかせるとみせかけ、折紙を手に入れようとします。

お紺と岩次の盃事が始まりました。そこへ貢がやってきます。お紺の気持ちを知らない貢は激怒し、お紺からは別れ話を持ち出され、遣り手の万野からもなぶられ、油屋から追い出されてしまいます。一旦引き下がる貢ですが、この後、次々と人に斬りつける事態へと話は進みます。

義太夫協会

かくとは知らずうとくと、恋には心引かれ来る。身の災難に福岡貢、とやかく案じ佇みける。

「ム、アノ歌は油屋の二階座敷。阿波の客が居続け騒ぎ。テモマ面白さうに唄ひをるな。ガそれに引き替へ心ならぬは万次郎様のお身の上、今宵につづまる御身の難儀。お紺に頼んだ折紙の詮議。今に何の返もないは、岩次の手にないのか知らん。マアなんにもせよお紺にちよつと逢ひたい」と

見廻す内より、出て来る喜助。出合ひ頭に、

「ヤア若旦那さん」

「オ、喜助か。ヤ幸ひ。どうぞ首尾してお紺さんに一寸逢はしてたも」

「へい畏りました」

と、奥口見廻し、

「イヤ申し若旦那様。憚りながら一寸あれへ」

「喜助、わしにか」

「へい」

「何の用ぢや」

「モ今改めて申し上げますはいかゞなれども、福岡様には許婚の奥さまもあり、御養子の御身分で、あ、いふお身持ではおためにならぬ。いつぞはご意見申したいご意見申したいと思ふ折からこのお出合ひ。イヤ申し若旦那様、あまりせきくお出でなされますところぢやござりませぬぞへ。サなにを猪口才などと思し召しませうが、モかやうに慮外を申しますものも、つづまるところはあなたのおため。ホンニ私は夜の目も合ず、案じてばかりをりまするはい。ムハ、ハ、ハ、ハ、ヤこれはしたり、何事も御存じのあなた様。必ずお気にさへられて、へい  
くくく下さりますな」

「ム、スリヤそちは喜兵衛が伴であつたよな。ヤこれはしたり。モさすれば我が為にも、家来同然。古主を忘れぬそちが意見。悪うは受けぬ

忝い。ガマアそれは格別。オオコリヤコレ大切な一腰。わしが持つていては人目に立つ。帰るまで預つてたも」

「へい私がしっかりとお預り申しました」

「ア、コレその一腰は青江下坂」

「エ、そんならこれが」

「いかに。刀は手に入るとも、これにつけたる折紙を銜られ、モいろと詮議をすれども、今において行方知れず、何卒折紙を取り返さんと、毎夜ここへ入込むも、もしや詮議の手がかりもあらうかと、心を砕く某。コレ必ず他言は無用ぢやぞや」

「ヤこれはく、さやうとも存ぜず、慮外の段は真つ平御容捨、シテその折紙を銜った奴が、この油屋の内に」

「サ確かにそれとは知らねども、もしやと思ふはアノ奥の。コレ喜助、一寸耳を貸しや」

「へい、そんならアノ岩次が」

「コレ、シイ、密かにく。なにかは奥の大騒ぎに」

「首尾を作るは最屈竟」

「若旦那さん、サアかうお出でなされませ」

と先に立つ。案内につれて福岡貢。暖簾のうちへ入りにつけり。こなたの障子引明けて、窺ひ出でたる徳島岩次。何か心に打ちうなづき、差足抜暖簾の内、忍び入って二腰の刀をそつと後先見廻し、おのが刀と貢が刀。手早く目釘コツチ。身を摺り替へる即座の悪知恵。暖簾の影より窺ふ喜助。それと白刃の二腰を元の如くに差し納め、またも納戸へ持つて入る。お紺は過ごす無理酒の、酔ひに心も乱れ足。  
「岩次さんく」

と、呼び立てられて出て来る岩次。

「ヲ、岩さんとしたことが、座敷をはづしお前はどこへ」

「ア、イヤ一寸手水に」

「アノマア嘘ばかり」

「エ、何の嘘を言うてよいものか。証人北六万野。ソレ用意よくば早これへ」

といふ内奥に声高砂。

「相に相生の松こそ目出度かりけれ」

北六万野がとりくくに、渡蓋とさんさかすずりのふた、めいぐくに携へて、

「サアく申しお紺さん。岩次さんと固めの盃。色直しはすぐに床入り」

「サアく媒介役はこの北六。嫁君から飲んで差し給へ」

と、無理に突きつけつきかくれば、堪えかねて駈け出る貢、お紺が盃引つたくり、落花微塵と投げつけたり。

「ヤイお紺。おのりやこの盃しては済むまいぞよ。コリヤお紺、おのりやこれまで言交したと、みな忘れたな。モ最前から見てるればほてくろしい座敷ぶり。エ、もう了簡が」

と立ちかかるを、岩次は引退け、

「ヤアくくかす禰宜の大馬鹿者め。身が揚げ詰めめ女郎に指でも

差さば、腹でも脛でもぶち折るぞよ」

といふに、万野がしゃしゃり出で、

「コレシコレ貢さん。お前ははんはマアこちの内へ誰が許してござんしたへ。お前のやうな油虫はな、顔見るのも胸が悪い。アイ起縁が悪い。サアくくくとととと去んでもらひましょ」

と、ずっかり言われてなほ急ぎ立ち、

「コリヤ万野。わりやマ味なこといふな。この貢が女郎の油をいつ吸

ふたことがある。サアくくそれ聞かう」

のいることがあるならば、打ち明けてかうくというて下さんしたら、なんぼ甲斐性のない私でも、三十両や五十両の金、まんざら否ともいふまいに、僅か二歩や三歩の端た金、お鹿さんに無心いふとは、モみすく知れたイヤサ、見下げ果てた心ぢやな。モウくく色も恋もさめ果てたはいな。サそれぢやによつてふつつりと、お前のことを思ひ切り、岩次さんになびくのでござんす。アイそう思うて下さんせ」

と、けんもほろろにいひ放す。

「こりあやいお紺。おのりや気が違つたなおのりや、モ流れの身にも誠ある者と思ひ、取交した起請誓紙。まだその上に大切な、イヤサ大事

のことまで請合ひながら、わりやそれぢや」

「エ、あたどんな違ひました。イヤサ、気が違ひました。アイ根性が腐りましたはいな。モまいくくくまいつかずと、早う去んで下さんせ」

と、口にはいへど心には『オ、道理でござんす。道理ぢや』と、いふにいはれぬこの場の時宜、血を吐く思ひ押隠す。納戸に始終立聞くと喜助。刀を持って走り出で、

「貢様。モウお帰りなされませ。悪いことは申しませぬ。サお預り申したお腰の物」

と差出す刀、引きたくり、腰に差す間も気はしゅらくら。刀の違ひに目もつかず、万野は傍へ立寄つて

「コレシコレ貢さん。お前はもうそれで喋り仕舞ひかへ。ヲ、気の毒やの、ヤコレシコレ貢さん。ちよつとこちらへお出でなんせ、サアく早うござんせ。エ、早うおいななんせといふに。ヤナニ貢さんへ。最前から段々の失礼。サアお腹が立たう。尤もでござんす。ガ私に免じてどうぞ堪忍して上げておくれなさんせ。ヤコレシ貢さん。なんばお前がやきくく思はんしてもナ、銭の切れ目が縁の切れ目

「アノマア白々しい顔はいな。ヤコレシコレお紺さん。最前の文見せてやらんせ」

と、いふにお紺が懐より、取出し渡す以前の文。一々貢が見てびっくり

「ヨウコリヤおれが名を騙つて、女郎のお鹿へ無心の状」

「なんと覚えがあらうがな」

「イヤ知らぬ。元より訳ある仲ぢやなし。こんな文やつた覚えはない。

あた穢らわしい、アノお鹿。風俗といひ面といひ、しつかり猿芝居のおそめ。ハ、あんまり采れてものがいはれぬ」

と悪口聞いて駈け出るお鹿、貢が前に台白なり。

「コレシコレ貢さん。最前から聞いてあればお前はん余りぢやぞへ

く。アイわたしやどうでお紺さんのやうに美しうはない。美しうはないけれど、顔でお客は取らぬぞへ。コレ肝心の時にはな、ぐつたり堪能

さすによつて、ついに一日の茶引いたことはござんせぬ。お前もそれを見込みに、アノ万野さんを頼んで附け文。その度々にコ、コレ見なされ。この通りにナア、二歩ちよつとお貸し、ソレまたこの状に三歩貸せ、

まだここにあるはいな、ソレ見なされ。また一両いるのと、モ親にも聞かぬ無心をば、五度十度のことないな」

「エイなにを」

「それに今更知らぬとは、ソリヤ卑怯ぢやく卑怯ぢやはいなく。

筆先でたらしこみ、身の皮はいだ生盗人。エ、腹が立つく」と、いひつつ両手に胸づくし、引つ掴む手をもぎ放し、

「エ、様々の戲言。身不肖なれども福岡貢。そちらに無心いふやうなおれぢやないはい。コリヤお紺。これにはなんぞ訳があるう。訳をいへ。どうぢやどうぢやい」

「ヲ、お前の内証の文が私の手に入り、腹の立つはコリヤもつともでござんす。ガ申し貢さん、お前と私が仲は人も知つたサ仲ぢやぞえ。金

ぢやはいな。アノお紺さんを恨みなさる、ことは微塵もないぞへ。お前のその素寒貧を恨まんせ。モほんくくお前のやうな貧乏神、片時置くのも家の不吉。サアとつとお帰りく。アイようお出なさったへ。サアお帰りくお去にんかいな。なんぞお忘れ物、なに煙草入れ、ドレくく私が取つて来て上げませう。ソレ煙草入、サアくお帰り。エエ去にやがれ」

と突き出す門口。堪えかねて刀の柄、手にかけながら忠孝の、二字に引かれて喰ひしぼる。

「チエうぬ」

「なんぢやへく、齒をむき出し草菜子をひねくつて、ア、何かへ、コリヤわしを斬る気かへ。面白く。サア斬られよう、サアお斬りくく」

「コリヤ万野おのれはな」

「なんぢやへく、サアお斬りなんせ。手から斬るかへ、おいどからかへ、サアお斬りく。エどこから斬らんすマ貢さん」

「カツ。エ、勝手にさらせ」

と、道を蹴立て、立帰る。

# 三、箏曲 江の島曲

えのしまのきよく

箏 中能島 弘子

松崎 美音能

福島 弘妙能

長田 悠貴能

上川 都淑能

三絃 田中 奈央一

山田檢校が安永六年（一七七七）に作曲した処女作とも言われています。作詞者は不祥ですが、初代山登檢校の父、指月散人百泰という説もあります。箏は雲井調子、三絃は三下りで通します。音楽の神である弁財天を祀る江の島縁起に主題をとったもので、最初の前弾きの後に江の島への参詣道行、情景となります。江の島の情景部分には、当時の流行歌謡を取り入れた内容の「貝尽くし」が入ります。この「貝尽くし」の歌は、江戸長唄の「相模蟹」にも取り入れられています。その後弁財天との関わりから竜口明神の由来を述べ、松風の音を「和風楽」「青海波」といった雅楽の調べになぞらえて「楽」となり、最後に比較的早いテンポで弁財天の神徳を称えて終わります。

山田流箏曲の中でも最も有名な曲の一つです。

日本三曲協会

前弾き

春過ぎて今ぞ初めの夏衣 軽き袂が浦風に

科戸の追風そよそよと 福寿円満限りなき 誓ひの海のそれならで 干

瀉となればいと易く 歩みを運ぶ江の島の絵にも及ばぬ眺めかな

水は山の影を含み山は水の心に任す 神仙の岩屋 名に聞えたる蓬

菜洞 峙つ岩根峨々として 随縁真如の浪の声 心も澄める折からに

海人の子供のうち群れて磯馴小唄も貝づくし 合

君が姿を見染めて染めて 引く袖貝を振り払う 恋は鮑の片思ひ

徒し徒波桜貝 梅の花貝その身は酔いな 粹な酔貝は男の心 こちは

姫貝ひと筋な 女心は そうじやないわいな 合

いつか逢瀬の床臥しに逢うて離れぬ蛤の その月日馬刀貝というを

頼みの妹背貝 歌うひと節恋の海

かの深沢の悪竜も 妙なる天女の神徳に たちまち一念発起して永

く誓ひを竜の口

昔の跡をとどめける幾千代も 尽きせじ尽きじこの島の磯山松を

吹く風 合 岩根に寄する波までもさながら和風楽 青海波を奏すなり 楽

道理なれや名にし負う妙音菩薩の調べの糸 永く伝へて 富貴自在

寿命長久繁栄を守らせ給う御神の 広き恵ぞ有り難き 広き恵みぞ有り

難き



四、清元節色増艶夕映

いろまさるもみじ ゆうばえ

浄瑠璃

清元 延勇輝

清元 延正路

清元 延勇子

清元 梅美紀

三味線

清元 梅丸

清元 延美葉

上調子

清元 延知寿

通称を「雁金」と言い、河竹黙阿弥作詞、二世清元梅吉作曲で明治十四年に東京新富座で初演された。この曲は「島衛月白波」の劇中で、隣の座敷から聞こえてくる清元として作られた「余所事浄瑠璃」というジャンルで、それがこの曲の第一の特徴です。内容は秋の風物を情緒的に歌ったもので、他の清元よりテンポの変化が少なく、落ち着いた雰囲気の中で、段切れも通常とは違いしつとりと終わります。聴き所としては、「クドキ」と呼ばれる「まだその時は卵の花の」の一節と、後に哥沢うたざわに取入れられた、端唄の「空ほの暗き」です。清元に端唄を取入れる事は幕末から流行しました。又、曲の終わりの部分「過ぎて時雨の冬近く」からは一中節の香りがしますが、これは作曲者二世清元梅吉の妻が一中節の名手、都みやこ一いちいいななであったからと思われています。虫の音が響く、秋の野原を想い浮かべながらお聴きください。

清元協会

〽雁金を結びしかやもきのふ今日残る暑さを忘れてし肌につめたき風

たちて ひるも音をなく蟋蟀こおろぎに哀れを添える秋の末

〽我身一つにあらねども憂にわけなきことにさへ

〽露の涙のこぼれ萩 くもりがちなる空ぐせに 夕日の影の薄紅葉梅

も桜も色かへる中に常磐の松のいろ

〽まだその時は卵の花の夏のはじめに白河の関なけれど人目をば

〽厭ふへだての族の宿飛び交う蝶に灯の 消えて若葉の 木下闇

〽おもはぬ首尾にしつぱりと結びし夢も短夜に覚めて恨みの明の鐘

〽空ほのぐらさ東雲に木の間がくれのほと、ぎす鬢のほつれをかきあ

ぐる櫛の雫かしづくか露か濡れて嬉しき朝の雨

〽はや夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く散るや木の葉のばらと

風にみだる、萩す、き

〽草の主は誰ぞとも名を白菊の咲出で、匂ふ此

家ぞ知られける



# 五、長唄秋の色種いろくさ

唄

芳村 伊四郎

今藤 長一郎

芳村 辰三郎

三味線

芳村 伊十一郎

芳村 伊十治郎

上調子

杵屋 栄四郎

弘化二年（一八四五）十二月一日、麻布不二見坂の南部侯邸の新築の所に開曲。作曲は十世杵屋六左衛門、上調子の作曲は十一世杵屋六左衛門かともいわれています。作詞については南部家の人々の名があげられています。南部藩不二見坂邸は下屋敷の一つで、現在の有栖川宮記念公園を含む一帯です。本調子の前弾きは箏曲「岡安砦」の旋律を取り入れ、いかにも秋という雰囲気を醸しだし、「虫の合方」では虫の音の数々が巧みな擬音の手付けによって表現されます。「夢は巫山」以下は琴歌風の節付けで、「琴の合方」から「うつし心」から三下がりとなり、曲の終わりを華やかなものにしていきます。従来、長唄の合方ではタテ三味線が手事を弾きましたが、この曲では上調子のほうが手事を弾き、全体的に上調子が活躍します。

長唄協会

本調子 秋草の 東の野辺の忍草 忍ぶ昔や古えぶりに 住みつく里は  
夏苧ひく 麻布の山の 谷の戸に 朝夕向こふ月雪の 春告鳥のあとわ  
けて

なまめく萩が花摺の 衣かりがね声を帆に 上げておろして玉すだれ  
端居の軒の庭まがき うけら紫葛尾花 とも寝の夜半に萩の葉の 風  
は吹くとも露をだに すえじとちぎる女郎花 その暁の手枕に 松虫の  
音ぞ 楽しき

変態續粉たり神なり又神なり新声婉転す

二上がり 夢は巫山の雲の曲雲の曙雨の夜に うつすや袖の蘭奢待 留  
めつつしつ睦言も 何時かしじまのかねてより 言葉の真砂しき島の  
道のゆくてもとも車 くるとあくに通うらん 峰の松風岩越す波に  
すががく琴の爪調らべ

三下がり 心にし心に花の春 月の秋風ほととぎす 雪に消えせぬ楽し  
みは 尽せじ尽きぬ千代八千代 常磐堅磐の松の色 いく十返りの花に  
諷わん





六、常磐津節 道行恋三度笠 (梅川・下)

みちゆきこいのさんどがき

浄瑠璃 常磐津 津太夫

常磐津 光勢太夫

常磐津 若羽太夫

三味線 常磐津 東蔵

常磐津 啓寿郎

上調子 岸澤 満佐志

天保十二年(一八四一)八月、江戸河原崎座初演とされるが、諸説あります。大阪淡路町の飛脚屋、亀屋の養子忠兵衛は、新町槌屋の遊女梅川に入れ揚げて金に困り、梅川を身請けする為、公用金を使い込んでしまっています。二人は忠兵衛の故郷、大和の国、新口村に逃げてきました。厳しい詮議の手が身近に迫った為、二人は死を決意しますが、其処で年老いた父親の孫右衛門の姿を見かけました。顔を合わせる事が出来ずにいた時、二人の目前で、孫右衛門が氷に滑り転びます。とっさに飛び出し介抱する梅川。義理の親子は名乗り合わずに、心底を語り合い、孫右衛門はそれと悟ります。梅川の機転で、ようやく忠兵衛親子は、手と手を取り合い、惜別の念と共に、永遠の別れを告げて立ち去ります。

常磐津協会

入りにける

大阪の義理と故郷の恩愛の、道は二つに別れども、血筋ばかりは一筋に、道場参りの帰り足、身を知る雨の小止みなく、野風に送る畑道、孫右衛門十老の足、歩むとすれどとぼくと、野口の溝の薄氷、滑るを止まる高足駄、鼻緒は切れて横様に、どうと転べば、

〽忠兵衛これは南無三と、もがけども出られぬ身 〽梅川慌て走出で、抱き起して裾絞り、梅 〽モシくどこも痛みは致しませぬか、お年寄の危い事、お足も洗ひ鼻緒も上げて上げませう、アアア危い事でござりましたナ、孫 〽ア、ヤレヤレ誰方知らぬが、かたじけなうござる、お蔭で怪我も致しませなんだ、若い女中のお優しい、年寄めと覚し召し、嫁御もならぬ御介抱、もうく手を洗はしやって下さりませ、幸ひこ、に、わらは沢山、鼻緒は私が上げます、もうく構はしやって下さりませ、サ手洗はしやって下さりませ、梅 〽アモシここに好い紙がござんす、こより捻って上げましよと、延べ取出す其手元、〽孫右衛門不思議さうに孫 〽オオこら辺りには見馴れぬ女中、こなさんは誰方なれば、此の様に懇ろにして下さる、と顔つれくと眺むれば、梅 〽はい私はオ、それく旅の者、私が舅の親父様、丁度お前のお年ばへで、格好も生き写し、他の人にする奉公とは、モさらく以て存じませぬ、お年寄った舅御様の、臥し悩みの抱きか、え、孝行は、嫁の役、御用に足て何ぼうか嬉しうござんす、さぞ連合は飛び立つ様にも思はれませう、ア、申し其紙と此紙と、替へて私が申し受け、父御に似たる親父様の、形見にさせたうござんすと、塵紙袖に押し包む、涙にそれと知られけり、〽言葉の端に孫右衛門、さてはそうかと思愛の、つきぬ涙を押し隠し、孫 〽此方の舅に此親仁が似たと言うての孝行か、ア、嬉しうござる嬉しうござるが、腹が立ちますわい、私も年長けた俵めを様子あって、久離切り大阪へ養子にやったが、傾城と言ふ魔がさして、人の金を盗んだとやら揚

句に所を駈落したとの噂、此の大和は生国なれば、十七軒の飛脚屋仲間、お上からは隠し目附、或は順礼古手買、節季候にまで身をやつし、此の在所は詮議最中、それも誰故其傾城の嫁御故、近頃ぐちな事ながら、世のたとへにも言う通り、盗みする兎は憎う無うて、繩かける人が恨めしいとは、此事よ、孫 〽ア、コレくこれハ、京の御本寺さまへ上げうど思うた金なれど、嫁、イヤナニ嫁御と思うてやるではない、只今のお礼のため、是を路銀にちつとなど、遠い所へサアく早う早う、梅 〽ア、ありがたうござりまする、お心付かれし此のお金、逆様ながら頂きます、〽大阪を立退いて、私が姿が目立てば、借り駕籠に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日餘りに四十兩、使ひ果して二歩残る、金ゆゑ大切の忠兵衛さん、科人にしたも私から、さぞ憎からうお腹も立たうが、因果づくぢやと諦らめて、お免しなされて下さりませ、孫 〽アアアアレあの人声は確かに追手、此裏道の小川を渡り、藪を抜ければ巨勢街道、早うく梅 〽段々のお志、ありがたうござりまする、とても事に親父様の、お顔をちよつと、孫 〽アコレく一寸でも顔見ては、妙閑殿へ孫右衛門が立ぬわいの、サ、未練な事言はずとも、此所を早うく、梅 〽サアそれは 孫 〽兩人さらば、〽子故の闇の目なし鳥、平沙の唱ふ血の涙、永き親子の別れには、安方ならで安からぬ、心残して別れ行く。

# 七、新内節 明烏夢泡雪

あけがらすゆめのあわゆき

## 雪責の段 ゆきぜめ

浄瑠璃 鶴賀 若狭掾 人間国宝

三味線 新内 仲三郎 人間国宝

上調子 鶴賀 伊勢一郎

初代鶴賀若狭掾が、安永元年（一七七二）に作つたと伝えられる、新内を代表する名曲です。明和六年（一七六九）七月三日、江戸の三河島であった伊藤伊之助と遊女三吉野との心中事件が題材といわれますが、作品では主人公の名前が時次郎と浦里となつています。金につまり、死を覚悟した時次郎が、浦里に一目逢い後生の回向を頼もうと、ひそかに妓楼の山名屋に来ますが、浦里と逢っているところを見つけられ、雪の降りしきる表に突き出されてしまします。ここまでが「浦里部屋」と呼ばれる上の巻。下の巻「浦里雪責」は、新内節草創期の端物の特色である退廢的な廓情緒が纏綿とただよい、降りしきる雪の中、禿のみどりと共に庭木に縛りつけられた浦里が、山名屋の主人にきびしく折檻されるという哀切極まりない場面です。時次郎が塀を乗り越え、浦里とみどりを救い出したのは一場の夢であったというのが結末で、外題の「夢泡雪」はこれに基づいています。

新内協会

きびしけれ

内には亭主が浦里を庭の古木に括りつけ折ふし降りくる雪ふぶき箒

おっ取り打つ音に禿みどりが取り付いて

禿「申し旦那さんモウご堪忍なされませ

ト嘆く禿も共縛り 浦黒涙の顔振り上げ

浦里「わたしが身は是非もなしみどりに何の咎あつてあの子は許して下

さんせ

ト云えば 亭主も不憫さと思えどわざと声荒く

亭主「コリヤヤイ浦里客を堰くこと客のため 女郎 大切身代が尚大事

あの客もまだ若き人 余り繁々通われては親がかりなら勤当受け主

持ちならば親方の手前仕損うはしれたこと 此の程年切替しもあの客

じやとあるこの上は 心中か駆落ち行末までが不憫さ故たとへ敵の末

にもせよ我が抱えとなりし女郎 殊に禿のうちより器量は人に勝れ

たれば外の子供とこと違い 心をつけて育てしもの 何んの憎いこと

があるうこ、をよう弁えて 思い直して奉公せよトさあ度々意見を

加えてもそれをそれとも聞き入れぬ その苦しみ心がら己れが罪

己れを責むるみどりめも おのれが使う禿なれば外の者への良き

見せしめサア思い切れ 思い切る心なら 今でも縄めを赦してくれん

コリヤヤい男ども 浦里めを気をつけい

ト云い捨て奥の一ト間に入りける

浦里あとを打ち眺め 涙に暮れていたりしが

浦里「エふお情けあるお言葉なれど 是はッかりはどうも忘れぬ お許し

なされて下さんせ まだ此の上にとのような悲しい苦しい責め苦でも

私や厭やせぬ どうなつても思い切られぬ いっそ添うわれぬものな

らば一緒に死にたい時次郎さん 殺してくだんせ 死にたいわいノウ

昨日の花は今日の夢 今我が身につまされて 義理と言う字は是非もな

や勤めする身の ままならず

浦里「チイこの苦しみに引きかえてあの二階の三味線はいつぞや主の

居続けに寝巻のままに引き寄せて互いに語る 樂しみの それに引き

換え今頃は 何処にどうしていさんすやらとにかく添われぬ二人が

身の上チイ味気なき 浮世じやなア

好いた男にわしや 命でも何の惜しかろぞ 露の身の消えば恨みもなき

ものを

浦里「コレみどりさぞそなたは悲しかる 私が憎かる堪えてたも悪い女

郎に使われて思わぬ苦しみ堪忍しや 今宵に限り此の雪は何の報い

ぞオ、寒かろう可哀やのう

禿 「イエイエ私は寒うはござりませぬが次郎さんはあのように若い

衆に叩かれさんしたが お前は口惜しゆうござんしょう 私も悲しゆ

うてならぬわいノウ

浦里「オ、よう云うてたもったくくくくく そなた迄さえそのように

主を思うてたもるもの わしが心を推量しや

たとえこの身は泡雪と 共に消ゆるも厭わぬがこの世の名残りに今一度

逢いたい見たいとしゃくり上げ 狂気の如く心も乱れ涙の雨に雪溶けて

前後正体なかりけり

男は兼て用意の一ト腰口にくわえて身を固め 忍び忍んで屋根伝いそ

れと見るより悲しさの 伝えてたわむ松ヶ枝も 今宵一ト夜の掛け橋と足

もそぞろに定めなき 難なく下へおり立って二人が縄を切りほどき

時次郎「コレコレ浦里こ、で死ぬるもやすけれどのがる、だけは落ち

てみんなついで此の塀を越すばかり 幸いこれなる松の枝伝うて行かん

諸共と互いに手早く身持えみどりも共にと取り縫る 可哀やこの子は何

とせん オ、心得たりとみどりを小脇に引つ 抱え甲斐々々しくも時次郎松

の小枝を浦里にしつかと持たせてあたりを見廻し 忍び返しを引ツばず

し梯子となして差しおろしようよう三人塀の上下りんと 思えど女の身

浦里は胸を据え死ぬると 覚悟極めし身の上 何か厭わんサア一緒と手を

取り組んで一足飛び 実に尤もとうなずきて互いに目を閉じト 思いひ

らりと飛ぶかと 見し夢は 覚めて 跡なく 明烏後の 噂や 残るらん

第四十三回邦楽演奏会 第二部 十六時開演

- 一、 常磐津節 乗合船恵方万歳
- 二、 義太夫節 義経千本桜 道行初音旅
- 三、 新内節 梅雨衣酔月情話(花井お梅)
- 四、 箏曲 秋の曲  
― 休憩十分 ―
- 五、 清元節 玉兔月影勝(玉兔)
- 六、 宮蘭節 小春治兵衛 炬燵の段
- 七、 長唄 勧進帳

※演奏者により歌詞に若干の違いがある場合もございます。また、歌詞の中に現代では不適切な語句を含む場合もございますが、古典の作品をそのまま演奏いたしますため、その点はご了承ください。

一、常磐津節 乗合船恵方万歳

のりあいぶねえほうまんざい

浄瑠璃 常磐津 駒太夫

常磐津 勢寿太夫

常磐津 松希太夫

三味線 常磐津 八百八

常磐津 菊与志郎

上調子 岸澤 式明

天保十四年(一八四三)正月、江戸市村座で上演された「魁香樹いせ物語」という大曲で、常磐津・富本・竹本・長唄の四段返しの変化舞踊の一つでした。お正月気分にあふれ、七福神の宝船の見立て、町の人々の風俗描写が、巧みに表わされています。初春の隅田川の渡し場に、女船頭・白酒売り・大工・通人・芸者(上演時の都合により、登場人物や人数が変わる事も多々あります。)などが居る所に、万歳の太夫と才蔵がやって来ました。そこで舞台上の人物達が、自分の商売や趣味の自慢話や芸を披露します。聞き所も多く、変化に富み、理屈抜きで楽しめる曲です。

常磐津協会

〔筑波根の この面かの面と口真似に 問わず語りを庵崎の 五色彩る宝船 よい乗合と座せられても 乗り遅れたは訝しな 色にや賢い それ様なれど 何じよさっしやれた エイエ エエ恋知らず イイイ 悔やむな そこへ気の付かぬ へへ太夫じゃなっけれど いずれも様へ改めて 御祝儀申し 入りのある 芝居をちよつと立ち見して ツイ遅なわるご無礼と 足を早めて来たりける

才蔵「ヤレく嬉しやく わしは又向こうへ越える船じゃと思つた ヤア美しい姉え達が ヤこれは有り難い 太夫「アアコレくその様に女さえ見るとイヤモ埒もない事を 女のない国から参った様に 無性に有り難がる事はないわさ 第一わしがエエ外聞が悪いわさ 才蔵「アアコレく太夫様 はるばる三河の国からこうして来るも お江戸サアの美しい姉え達を 見物がてらじやて マア一服 吸うべえかな 通人「ホウさしては足下達も頗る好色家と見えるね ヤ極く嬉だの ハハハハハ ヤ頼もく 大工「しかしながら袖振り合うも他生の縁だ 何ぞ面白え話を みんなやつつけねえ 芸者「ほんにそれが良うござんしょう 大工「まず初春の事だから白酒屋さん お前先生 やつつけねえ 白酒売「へ左様ならばお望みに任せ そもく白酒の始まりは 富士の白雪や朝日で解ける 解けたがどうしたエ 娘島田はサ 口舌の半ばでサ寝て解ける ヤレヨイ 悪い評判で売り掛ける

通人「ヤこれは白酒の先生 妙々ハハハハハ 才蔵「サアくこれから番匠殿お手前の番じゃく 大工「エエ仕方がねえ そんなら大工道具になぞらえて こじつけ話をやつつけべい 番匠の始まりは 叩き大工の此方等が 聞いても上の空仕事 嘘を突撃 差曲尺を 使い馴れたる友達と 直に裏釘返して後は ほんに辛気な溝鉋 憎や節木の性悪と才蔵「サアくこれから宗匠先生 玉句を承りとうござる 大工「サアその発句とやらばつくとやら早く聞きてえね サアく早くくく

通人「アアそな宜いソ諸事風雅の狂道は 士農工商の生業迄も 穿たねばならぬて エエ凝つては思案に能わずと申せば 各々方 マア騒がせ給うなく エエこうつと春風 エエ春風や 春風や 黒い羽織に小脇差を 差いてゆらりと船場へ下りやる 通人「ウウイ ヤ甚だ酷酩エエ時に景色は未明の事に限りやすね 白昼は埃まんくとして野暮者たつぷ コレ恐るべでげす 乞願わくば船衆 急ぐべだよ こちらも急ぐ送り船 オヤ程なく着岸 通人「サア一つ聞こし召せ 所を重ねて香りツンく花に風 軽く来て吹け酒の泡 フッフ ハハハ フフハハ ウハハハハ ハハハ 笑い昂じて腹立てて エイエエ筋をゆうべや ウウイ泣き上戸

芸者「サアく三河の太夫さん これからお前の番じゃく 太夫「これは又迷惑な 才蔵仕方がないわ まず初春の事じゃから おめでとう寿を さらばお祝い申そう と 鼓おっ取り 声繕い アアヤンリヤ めでたやナア 鶴は千年の名鳥なり ヤ亀は万年のヨ ご壽命保つ 鶴にも優れ 亀にも増す ヤ今日この お家をば 長者の芯とヨ エエ祝い栄えまします 建初めの柱をンばヨ 綾と錦で包んまして ハ弓んと矢をば 付けんさせてヨ これは火防の柱とて 鬼門を守らせ候えば ア一本の柱が一の宮ヨ アソレ二本の柱が二制咤迦 ハオヤ三本の柱が神の明神 アヤレ四本の柱がしろくや天王 五本の柱が牛頭天王 千本余りの柱をンばヤ おっ取り立て喜ばれたり 誠にめでとう 候いけるとは これから そろく万歳 オヤ万歳 へへ万歳 オヤ万歳 へへ万歳 万歳 〳〵それ万歳染で おん喜びだ ハハハハハハハ 三度な オヤ三度な コレ三度鶴が舞にて オヤあだな舞に候わず ハ昔また ハハ後白河の法皇様の御時にコレワイ 熊野山へ御参内の折からにコレワイ 諸太夫の装束で 左折りの烏帽子にてコレワイ その時京

都まで上りては ソレ大内様の御門かやコレワイ 〽お江戸サアへ下りては これ將軍様の御門かやコレワイ 〽旦那さんの御門と三幅は一對にてコレワイ 〽元日に深く開かアヤレ きりやきりりやきりり 〽ハ又も取っちやめでてえものが参る 〽何がが参る 〽御喜びの大判やソレ小判がコレワイ 〽佐渡で湧いた金かや 〽オやお江戸で出来た金かや 〽ソレ旦那さんへ湧つくはヤレ ざっくざっくにやざくら ソレそこらの姉様の 頬の回りや お鼻の回りが へへ へへ へへ へへ へへ 〽べっちららこ 〽オヤまっちららこ 〽べっちららこ 〽オヤまっちららこ 〽ホホヤレ 〽まっちららこに まんざらこ まんざら野暮では オヤどうした才蔵 ありやせまい 〽代々栄えて 御方の長者よ アなお万歳楽までも やら 〽へ おめでとう 〽共に嬉しき乗合に 声春雨と鳴り響く 初雷に人々は 我が家をさして急ぎ行く

## 二、義太夫節 義経千本桜

道行初音旅

静御前	竹本 綾之助
忠 信	竹本 土佐子
	竹本 土佐恵
	竹本 越京
三味線	鶴澤 寛也
	鶴澤 津賀花
	鶴澤 三寿々
	鶴澤 賀寿

延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。中でも「道行初音旅」は、太棹三味線の音色が華やかに広がる名曲です。

源氏の勝利に終わった源平の戦いの後、源義経と兄頼朝の確執は深くなります。頼朝に追われた義経らは都を落ち、吉野へとかくれることになりました。義経が吉野にいと聞いた愛妾静御前は義経から与えられた初音鼓を携えて桜の花が咲く吉野へと向かいます。お伴は家臣の佐藤忠信です。実はこの忠信、鼓の皮となった親狐について行く子狐の化身だったのです。

義太夫協会



恋と忠義はいづれが重い、かけて思いはかりなや。

忠と信の武士に、君が情けと預けられ、静かに忍ぶ都をば、後に見捨て、旅立ちて、作らぬ形も義経の、御行末は難波津の、浪にゆられて漂ひて。今は吉野と人伝の、噂を道のしほりにて、大和路さして暮ひ行く。谷の鶯な、初音の鼓く。調べあやなす音につれて、連れてまねくさ。遅ればせなる忠信が旅姿、背に風呂敷を、確と背たら負ふて、野道畦道ゆらり、ゆらり、軽いとりなりいそくと。

「目立たぬ様に道隔て、女中の足と侮つて、さぞお待ち兼ね、こ、幸ひの人目なし」

と、姓名添へて給はりし、御着長を取り出だし、君と敬ひ奉る。

静は鼓を御顔と、よそへて上に沖の石、

「人こそ知らね西国へ、御下向の御海上、波風荒く御船を、住吉浦に吹き上げられ、それより、吉野にまします由、やがてぞ参り候はん」

と、互ひに形見を取り納め。

雁と燕はどちらが可愛ひ、花を見捨つる雁金ならば、文の便もまたの縁、エ、さふぢやいな。諷ふ声々面白や。

「げにこの鎧を給はりしも、兄継信が忠勤なり。誠にそれよ来し方の、思いぞ出づる壇の浦の、海に兵船平家の赤旗、陸に白旗、源氏の強者。

『あら物々しや』と夕日影に長刀を引きそばめ、『何某は平家の侍、悪七兵衛景清』と、名乗り掛けく、薙ぎ立てく、薙ぎ立つれば、花に嵐の散々ばつと、この葉武者、『言ひ甲斐なしとや方々よ、三保谷の四郎、これにあり』と、渚に丁ど討つてかゝる、刀を払う長刀の、えならぬ振舞ひいづれとも、勝り劣りも波の音、打ち合ふ太刀の鏝元より、折れて引く汐返る雁。勝負の花を見捨つるかど、長刀小脇にかい込んで、兜の鍔を引掴み、後へ引く足よろしく、向ふへ行く足たじく、むんずと鍔を引き切つて、双方尻居にどつかと座す。『腕の強さ』と言ひ

### 三、新内節 梅雨衣醉月情話

浜町河岸の段

浄瑠璃 岡本 宮之助

三味線 鶴賀 五代寿郎

上調子 岡本 文之助

ければ、『首の骨こそ強けれ』と『ハ、、、』『ホ、、、』笑ひし後は入り乱れ、手繋ぎ働き兄継信、君の御馬の矢表に駒を掛け据ゑ立ち塞がる、才、聞き及ぶその時に、平家の方には名高き強弓、能登の守教経と名乗りもあへずよつ引いて、放つ矢先は恨めしや、兄継信が胸板にたまりもあへず真つ逆様」

あへなき最後は武士の、忠臣義士の名を残す、思ひ出づるも涙にて、袖はかかぬ筒井筒、いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかは朽ちしかるべきと、互に勇めくられ、急ぐとすれどはかどらぬ、芦原峠かうの里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹き私ひ、雲と見紛ふ三吉野の、麓の里にぞ

「明治の新内」というのは二題しか伝わっていません。この浄瑠璃は伝承された「明治の新内」という意味で珍重です。当時の味もよく出ていますし、曲の組み立ても面白く手際よく出来ています。明治二十年（一八八七）六月九日夜、東京の隅田川、浜町河岸で待合酔月楼の女将花井お梅二十四歳が自家の番頭八杉峰吉三十三歳を殺した事件を「弥次喜多」や「まさ夢」の作者富士松魯中の子、五代目加賀太夫（明治二十五年三十八歳没）が新内にまとめ「梅雨衣酔月奇聞」として発表したものです。有名な川口松太郎作の芝居よりはるか前に作られたものです。お梅は大正五年十二月十三日五十三歳でなくなりました。

行く水の。流れは絶えぬ大川の。新大橋と両国の。橋間に洩るる漁り舟。灯影かすかに川浪の。音も静かに降る雨の。晴れ間を待つてようようと。お梅はひとり物思い。夢路をたどる心地にて。うつつともなく浜町の。わが家間近く歩みしが。

常とは違いわが内へ。はいりにくさうそくと。内の様子うかがえば。ひと声絶えて静かなり。どうぞ致して峰吉を。呼び出す工夫と、思案のうち。車ガラ／＼ひとりの男。お梅を見るよりそばに寄り。「誰かと思ひましたら酔月のお神さん、大そう遅いお帰り、まだどちらへぞおいでですかえ。ト言うにお梅はよい首尾と。兼て知つたる男ゆえ。「さあ、長く内をあげたゆえ、自分の内でも敷居が高く、そして夜更にたたくのも、世間へ対して気の毒さ、ナントまあお前が行つて峰吉を呼び出して来て貰いたい。ト言われて車夫は。「へいお安い御用でございます。そんならあなたも御一しよに。「いいえ、わたしはここに待っているから、早く行つて峰吉を。「へい、左様ならチョット行つて参りましょう。ト行かんとするを。「アノ、わたしと言わずに呼び出して。「へい／＼よろしうございます。お淋しかろうが暫くここにト。言葉残してかの男。酔月さして急ぎ行く。

お梅はあとを見送りて。「アア、思えば思えばわたしほど、ほんに因果な者はない、幼い時に貰われて、養父のために糸竹の。憂きふし繁き三筋の流れ。辛い座敷の折り合いに。笑うは結句、泣くよりも。悲しいことのたびたびに。ほんの親たちあるならば。思う間もなくこの苦勞。なんの報いか悲しやと。女ごころの、くどくどと。くどき歎くぞ哀れなる。

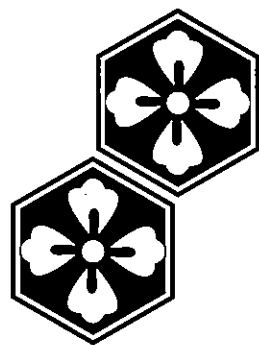
かかかる歎きの折りからに。以前の車夫は立ち戻り。「いやお神さん、さぞお待ち遠で、エエお宅へ参りましたら峰吉は留守とのことゆえ、帰りの程はと聞きましたら、もう十二時も過ぎたればそのうちには帰り

止り。「ヤア大そうらしい、峰吉／＼と言うのは誰だ。ト透し眺めてびっくりし。さてはと思えど素知らぬ振り。顔見合せて。「ヤアお梅さん、じゃないお神さん、どうしたのですエ、お前さんが帰らぬので旦那が大そう御立腹、そしてマア今頃どこからお帰りですネ。「アイどこから帰ろうともわたしの内へわたしが帰るのだからそんな詮索はいらないよ、また何時に帰ろうとも私の自由、だが内で話の出来ないことがあるんだから、それでここに待っていたのサ。ト聞いて峰吉まじめ顔。「へエ、そりヤアお梅さん、ほんまかエ。トして見りヤ男ぶりには依らぬものかいな。トしなだれかかるを。突き放し。「峰吉、お前はマアあんまりな人だねエ。ト言われてモジ／＼あたまを搔き。「アアモシ姐さん、何で私があんまりだエ。「アレサ大きな声を出すには及ばないヨ、しらば／＼くくても私アみんな知っているヨ。「いやさ、何のことだか知らねえが、知っているとはどういう訳を。「サア、訳はお前の胸にある。女と思ひあなどつて、ある事ない事親たちへ吹込むゆえに内のもめ、私が留守を幸いに親をだましてあの内を乗取つた上私まで慰む心であろうがナ、エエ思はず、人でなしト。ハッタと睨むその有様。角目立つたる形相に。峰吉も興味悪く。「これサ姐さん、そんな難題言われちヤアこの峰吉が迷惑だ、恨みがあるなら内でゆ／＼聞きましよう。夜更け小更けに往来で。マどうする気だと突き飛ばせば。トどうするものか、こうするト。武者ぶり付くを。ト振り払い。もうこれまでと峰吉が。拳つかんで振り上げれば。こなたも透かさず立ち上り。兼て隠せし光り物。取るより早く峰打ちの。手元狂うて思わずも。脇腹ぐつと差し通せば。不意の深手に。「うわっ、ひ、人殺し、人殺しだあ。ト峰吉が。苦痛ながらも逃げ廻るを。日頃の無念思い知れト。恨みは深き川ばたに。浮名を流す酔月情話。

ましよう。言い置いてよいことならばトおっしゃいましたが、ほかに御用はありませんかエ。ト聞いてお梅は不審顔。「ハテ、今日に限って峰吉が留守とはホンカ。トいつわりか。いっそのことに、ふん込んで。

「アイや／＼、それでは世間を騒がすのみか、かえってひとの笑い草。トは言えせども峰吉に。逢わねばならぬ今宵の首尾。マア何とせん、どうしようト。思案にくれし涙をば。袖に隠せし一物の。ありとは知らずの毒さ。「いや申し、どういふ御用か存じませんが、大そう御心配の御様子、何はともあれ峰吉の帰るまで、汚ねエけれどあつしが宿でお待ちなさるその内には、程なく帰るでありましよう、ヤア、噂をすれば影とやら、アレあの提灯は確かに峰吉だ。ト言うにお梅は打ち眺め。あたり見廻し。「オオそれ／＼、そんならお前はここの雨止みに少しも早く帰つておくれ、これはあんまり少ないが。ト紙にひねって渡せば、頂き。「これはマア毎度たくさんにありますがどうござります。左様ならばお神さん、もうお別れに致しましよう。御機嫌よろしうお休みト。

車夫は。いそいそ梶棒を取つてわが家へ立ち帰る。ト向うへチラチラ小提灯。酔月という番傘を。あみだにかつぎ峰吉が。よろよろしながら歩みくる。「うーい、人間というものも色々に化けるものだ。俺も元は歴とした貧乏人の御子息様、若い時から堅気が嫌い、気儘氣隨の放埒に身を持ちなしたその末が、役者の内の男衆から姐さん方の箱廻し、ヤレ峰吉と、ソレ峰吉とこき使われ、いやもう馬鹿々々しいと思つうち、運の来たのか知らねえが、今ではマアこの浜町河岸の酔月楼の番頭様とまで成り上つたが、これから先きが一つの思案う、どうかアノ酔月の親仁をだまし込み、花井の家を俺が手に入れ、否でも応でも行く行くはアノお梅さんはわしが女房、そう行きやうまいナ、エエうまいナト。うぬぼれ／＼ひよろ／＼と。石につまづき提灯消えて真の闇。お梅は声かけ。「オイ峰吉、峰吉。ト呼び止められて立ち



# 四、箏曲 秋の曲

箏

本手

〈人間国宝〉

米川 文子

米川 文清

鈴木 文徳加

中西 文百加

山元 文志生

五月女 文紀

齊藤 文香代妃

広沢 文尤加

尺八

川瀬 順輔

箏

替手

お琴は中国の唐から、平安時代を迎えていた日本に初めて伝えられた楽器ですが、以来わが国の人々に愛されて独自の発展を遂げました。検校と呼ばれ、今で言います大先生が各地で演奏家や作曲家として活躍をいたしました。庶民の大きな楽しみとなったばかりではなく、芸術性の高い音楽として広く認められるようになりました。

さて「秋の曲」ですが、幕末に名古屋で作曲家として知られていました吉沢検校の作品です。彼の考案しました古今調子という全く新しい調弦法でお箏のために作られた五つの曲の一つで、お箏の二部合奏形式で演奏されます。歌は『古今集』から六首の秋を歌った和歌が選ばれて歌詞とされています。例えば「月」「もみじ」「秋の風」「菊の花」などが出てまいります。しっとりと美しい曲の流れにのせて、美しい日本の秋を思いおこしてください。

日本三曲協会

さのうこそ早苗とりしが いつの間に

稲葉そよぎて 秋風の吹く

久方の 天の河原の 渡守

君渡りなば 楫かくしてよ

月みれば ちぢにもものこそ かなしけれ

わが身ひとつの 秋にはあらねど

山里は 秋こそことに わびしけれ

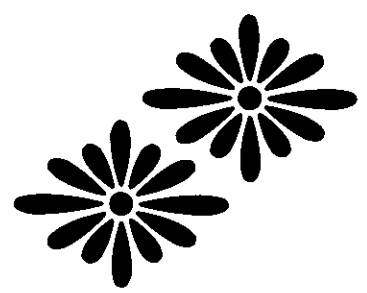
鹿の鳴く音に 目をさましつ

散らねども かねてぞ惜しき もみじ葉は

今を限りの 色とみつれば

秋風の ふきあげにたてる 白菊は

花かあらぬか 浪のよするか





## 五、清元節 玉兔月影勝

たまうさぎつきかげかつ

### 浄瑠璃

〈人間国宝〉

清元 清寿太夫

清元 榮志太夫

清元 瓢太夫

### 三味線

清元 三之輔

清元 吉寿朗

### 上調子

清元 雄二郎

通称を「玉兔」と言い、二世桜田治助作詞、清沢万吉作曲で、文政三年（一八二〇）に江戸中村座で初演されました。本名題の「玉兔」は月に兔が住むという伝説から月の別名「玉兔」の事。「月影勝」は、亨保から明治にかけて江戸で売られた影勝団子の事で、黄粉をまぶした団子が月の色にも勝る、という意味でつけられました。内容は、月でお餅をついていた兔が飛び出して来て、団子作りの踊りを踊ったり、カチカチ山の兔の手柄話をするといいものです。この曲は「雪月花」に因んだ「月雪花名残文台」と言う七変化所作事の一つですが、清元に昔話を取入れるのは珍しい事でした。曲の後半、「お月様さへ嫁入りよなさる」も月の古いわらべ歌から取っています。誰もが知っているカチカチ山のお話を清元で演じるとどうなるか、場面を想像しながらお聴きください。

清元協会

〽実に 樂天が唐詩に つらねし秋の名にし負う 三五夜中 新月の中

中に餅つく玉兔 餅ぢやござらぬ望月の 月の景勝

〽飛団子 やれもさうや やれやれさてな 白と杵とは女夫でござる

やれもさやれもさ 夜がな夜ひと夜 お、やれ と、んが上から月夜に

そこだぞ やれこりや よいこの団子が出来たぞ お、やれ

やれさて あれはさて これはさて どっこいさてな よいとくく

くよいととなな〽これわいさのよい 〽これはさておき 〽昔々やつ

がれが 手柄を夕べの添乳にも ば、喰た ぢ、やがその敵 うつや

ぼんぼらぼんと腹鼓 狸の近所へ柴蒨に きやつめもせたら大束を

えつちりく えぢかりまた シヤござんなれ こ、こそと 後から火打

で かちく かちく かちく 〽かちかちの山と 云ううちに 〽あ

つつ 〽あつつつ 〽そこで焼傷のお薬と 唐辛子なんぞで みしらし

て 〽今度は猪牙舟 〽合点だ 〽心得狸に土の船 面舵取舵ぎつちら

こ 浮いた波とよ山谷の小舟 焦れ焦れて通わんせ こいつは面白おれ

さまと 洒落る下より ぶくく 〽のうく 〽これはも泣ツ面よい気

味しゃんと仇討 それで市が栄えた 手柄話にのりがきて

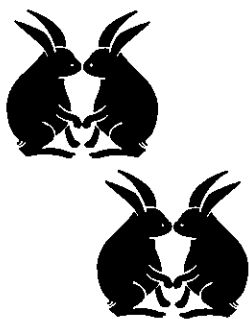
〽お月様さへ嫁入りなさる やつときなさるせ とこせく 年はおいく

つ 十三七ツ 〽ほんにサア お若いあの子を生んで やつときなさる

せ とこせく 誰に抱かせましようぞ お方に抱かしよ 見てもうまそ

うな品物め 〽しどもなや 〽風に千種のはなうさぎ 風情ありける月

見かな。



## 六、宮菌節 小春治兵衛 炬燵の段

〈人間国宝〉

浄瑠璃 宮菌 千碌

宮菌 千よし恵

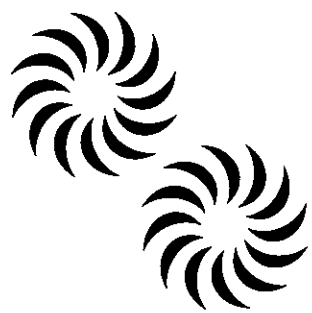
三味線 宮菌 千佳寿弥

宮菌 千幸寿

本調子<sup>かどおと</sup>門送り<sup>かどおと</sup>さえそこそこに、敷居を越すや越さぬうち、炬燵に治兵衛はまたころり、被<sup>かむ</sup>る蒲団の格子縞。まだ曾根崎を忘れずかと、あきれながらに立ち寄って、蒲団を取って引きのくれば、枕に伝う涙の海、身も浮くばかり泣きいたる。胸ぐら取って、炬燵の櫓<sup>やぐら</sup>に引き据え、ええあんまりじゃ治兵衛殿、それほど名残が惜しくば、なぜ書かしゃんしたもったいない。親兄弟や女房を、騙<sup>だま</sup>し足らいで神さんや、仏さんを証拠にして、モさっきのような恐ろしい、誓紙書かぬがよいわいな。一昨年<sup>おとしし</sup>のこの月の、中の亥の子に炬燵開け、その祝儀じゃとこれここで、枕並べてそれから、女房の懐には鬼が棲むか蛇<sup>じゃ</sup>が棲むか。謡<sup>うたい</sup> 講<sup>こう</sup> じやのつき合<sup>あ</sup>いじやの、庚申<sup>こうしん</sup>待ちぢやとちよつぼくさ、後から剥げる聞<sup>き</sup>に合<sup>あ</sup>いに、騙<sup>だま</sup>されながらたしなんで、五度に一度の怪気<sup>うれんき</sup>さえ、心に思う百歩<sup>ひゃくふ</sup>一、思いやりでもあることか、元日から大晦日、年が年中外へ寝て、内には水が月夜も聞も、ようも奇特<sup>さうがよ</sup>に廊通<sup>さうがよ</sup>い、子<sup>こ</sup>の可愛さも商売も、世間の義理も思惑も、おやまに代えた色事師。ほんに女夫<sup>めうと</sup>は名ばかりで、女房に秋の夕鳥、可愛くは私<sup>わし</sup>がごと、泣いてくれるかたまたまた、大事のお前の身の上に、生きる死ぬるの義理詰めが、出来はせぬかと明け暮れに、泣いて暮した月と日の、二年というもの菓守<sup>ももり</sup>にして、嵩<sup>たか</sup>じくた色狂<sup>きやう</sup>い。ようく伯父さん伯母さんの、慈悲な意見で今日の今、心置きのう睦<sup>むつ</sup>しう、寝物語をしようものと、楽しんでいた甲斐もない。それほど名残が惜しくば、泣かしゃんせ、泣かしゃんせ。その涙が蜷川<sup>しじみがわ</sup>へ流れて、小春が汲んで呑みやるぞや。さりとて邪険な胸欲な、むごいつれない心やと、恨みかこつぞ道理なる。

略称「こたつ」。近松門左衛門作「心中天の網島」の中の「炬燵の段」を宮菌鸞鳳軒が脚色したもので、安永二年（一七七三）刊の『宮菌鸞石』に「情の二重帯」として初めて見えるが、現在は初めの四分の一ほどが語られています。妻も子もある紙屋治兵衛は、曾根崎の遊女小春と深い仲になり、このままでは心中しかない。心配した治兵衛の妻おさんは、夫と別れてくれるように小春へ手紙を書いて頼みます。小春はその気持ち察して偽りの愛想尽かしをして別れるのますが、それを知ったおさんの父親は、それを確認しに来て治兵衛に誓紙を書かせます。安心した義父を送り出した治兵衛は炬燵に入って悔し涙に暮れ、それを見たおさんの恨みごとの部分です。宮菌節は上方で生まれ、江戸時代の終わり頃に江戸へ伝えられました。江戸時代は絶えてしまいましたが、江戸時代からの曲は十段。上方風に情愛深くしんみりと語り、三味線は独特の柔らかい音色が魅力です。

古曲会



# 七、長唄 勸進帳

かんじんちよう

唄

〈人間国宝〉

鳥羽屋 里長  
鳥羽屋 文五郎  
鳥羽屋 長孝  
鳥羽屋 長秀  
鳥羽屋 三五郎  
三味線  
杵屋 五三吉  
杵屋 五吉郎  
杵屋 五三吉次  
杵屋 五之吉  
上調子  
杵屋 五三吉雄  
福原 徹彦  
小鼓  
望月 洗三郎  
望月 太三郎  
小鼓  
藤舎 華鳳  
大鼓  
望月 正浩

兄頼朝の追手から逃れるため山伏姿で京を出た義経一行が、加賀国安宅関で富樫左衛門の追及を弁慶の機転で切り抜ける、歌舞伎十八番の一つとしても名高い名曲。作曲は四世杵屋六三郎、作詞は三世並木五瓶。初演は天保十一年三月、木挽町河原崎座で行われた初代團十郎没後百九十周年追善興行です。この時、五代目市川海老蔵が弁慶を勤めました。なお、滝流しの合方は三代目杵屋正次郎が明治時代に新たに作曲して加えたものです。この曲が長唄の代表的名曲として数えられているのは、歌舞伎においても「勸進帳」が代表的な演目であり、曲自体も長唄として非常に優れた作品であることが大きいからです。全曲を通して極めて自然な手付けがなされ、そのすべてがよく洗練されて含蓄に富んでおり、台詞の合間で人物の動きを説明するような歌詞が続く所でも、同じ手を用いることなく、工夫された特色ある手が付けられています。また、一中・説教・大薩摩等の節調を幅広く取り入れ、これを上手く消化することで長唄そのものの領域を広げ、曲節をより豊かなものにしていきます。今となっては珍しくない大薩摩の手付も、当時は大薩摩がまだ長唄の領域に入っていない時代でしたので、作曲者による破格の試みであったことが伺えます。

長唄協会

謡ガカリ・次第の衣は篠懸の 旅の衣は篠懸の 露けき袖やしほるらん 本調子の時しも頃は如月の 如月の十日の夜 月の都を立ち出でてこれやこの 往くも還るも別れては 知るも知らぬも逢坂の山隠す 霞ぞ春はゆかしける 波路遙かに行く船の 海津の浦に着きにけり いざ通らんと旅衣 関の此方に立ちかかる それ山伏と云っぱ 役の優婆塞の行義を受け 即身即物の本体を 此処にて討ちとめ給はんこと 明王の照覧はかりがたう 熊野権現の御罰当たらんこと 立所に於て疑あるべからず 庵阿毘羅咩欠と 数珠さらさらとおし揉んだり 元より勸進帳のあらばこそ 笈の内より往来の 巻物一巻取り出し勸進帳と名付けつつ 高らかにこそ読み上げけれ 士卒が運ぶ広台に 白綾袴一重ね 加賀絹あまた取揃へ 御前へこそは直しけれ こは嬉しやと山伏も しづしづ立って歩まれけり すはや我君怪しむるは 一期の浮沈此処なりと 各々後へ立ち帰る 金剛杖を押取って 散々に打擲す 通れとこそは罵りぬ 方々は何故に かほど賤しき強力に 太刀かたなを抜き給ふは 目垂れ顔の振舞 臆病の至りかと 皆山伏は 打刀抜きかけて 勇みかかれる有様は 如何なる天魔鬼神も 恐れつべうぞ見えにける 士卒を引き連れ関守は 門の内へぞ入りける つひに泣かぬ弁慶も 一期の涙ぞ殊勝なる 判官御手を取り給ひ 鎧に添ひし袖枕 かた敷く隙も波の上 或る時は舟に浮かび 風波に身を任せ 又或る時は山脊の 馬蹄も見えぬ雪の中に 海少しあり夕浪の 立ち来る音や須磨磨石 とかく三年の程もなくなく 痛はしやと 萎れかかりし鬼あざみ 霜に露置くばかりなり 互いひに袖を引き連れて いざさせたまへの折柄に 二上り 実に実にも心得たり 人の情の盃を 受けて心を留むとかや 今は昔の語り草 あら恥づかしの 我心 一度見えし女さへ 迷ひの道の関越えて 今又ここに越かぬる 人目の関の遣る瀬なや ああ悟られぬこそ浮世なれ 本調子 面白や

山水に 面白や山水に 盃を浮かべては 流に牽かるる曲水の 手先づ 遮る袖ふれて いざや舞を舞はうよ 元より弁慶は三塔の遊僧 舞延年の時の和歌 是なる山水の 落ちて巖に響くこそ 鳴るは滝の水 鳴るは滝の水 日は照るとも 絶えずとうたり 疾く疾く 立てや手束弓の 心許すな関守の人々 暇申してさらばよとて 笈を押取り肩に打ち掛け 虎の尾を踏み毒蛇の口を 遁れたる心地して 陸奥の国へぞ下りける

### 本日のナビゲーター

#### 三遊亭王楽

昭和五十二年、東京都練馬区生まれ。父は三遊亭好楽。駒澤大学英文科卒、平成十三年に三遊亭円楽に入門。二十七番目の弟子となり同時に父と兄弟弟子になる。円楽師からは過去最多といわれる十演目を直接習い、平成十六年五月に二つ目昇進、平成二十一年十月に真打ち昇進。伸びやかな感性と現代性が特徴で、持ちネタは現在二百に迫る勢い。二つ目披露公演には、史上最高ともいえる豪華出演者が脇を固めて注目を集めた。

#### 邦楽連合会（事務局 日本三曲協会内）

##### 一般社団法人義太夫協会

事務局 電話 〇三・三五四一・五四七一  
<http://www.gidayu.or.jp>

##### 清元協会

事務連絡所 電話 〇三・三七三九・六七六五  
<http://www.kiyomoto.org/>

##### 一般財団法人古曲会

事務局 電話 〇三・三三四八・五〇二一

##### 新内協会

電話 〇三・三二六〇・一八〇四

##### 常磐津協会

事務局 電話 〇三・三六三六・二二二〇  
<http://www.tokiwazu.jp/>

##### 一般社団法人長唄協会

事務局 電話 〇三・三五四二・六五六四  
<http://www.nagauta.or.jp/>

##### 公益社団法人日本三曲協会

事務局 電話 〇三・三五八五・九九一六  
<http://www.sankyoku.jp/>

平成二十六年の邦楽演奏会は

三月十五日（土）を予定いたしております。